

妹尾義郎に関する一考察

——本多日生の影響——

木村 憲 明

はじめに

近代の日蓮教団において特徴的な生涯を送った人物の一人に妹尾義郎（^{せのおきろう}一八八九—一九六一）がいる。一九一九（大正八）年の大日本日蓮主義青年団（以下、青年団）の結成から、新興仏教青年同盟（以下、新興仏青）の結成と弾圧、戦後における活動と、彼の生涯は波乱に富んだものだ。この生涯において顕本法華宗の本多日生の影響は欠くことができないように思われる。

本稿は、妹尾への本多の影響について一考察を加えるものである。

一、経過

妹尾が本多と出会ってから本多の死去により別れるまでの経過を略述すると、次頁表のようになる。

二、青年団時代

① 青年団と妹尾の活動

妹尾が本多に師事した理由は、国柱会で働きたいという希望が叶わない中、遠縁の知り合いから本多を紹介され、本多の「平民的な態度に」「好感がもたれたし、その日蓮主義観も偏狭な法華経一辺倒でなく、一切経の開頭統一といったおらかな学風だった」ことによる。^①

その後、統一団の専任事務をしながら本多の講演の前座を務める等、かなり忙しい日々を送っていたが、一九一九（大正八）年一月五日、青年団を結成する。青年団の趣旨は、若者は自分の生活の場で一念三千の日蓮主義的生き方を実践して法華経信仰を広める戦士たれというものだったが、^②青年団とそこでの妹尾の活動は、少なからず本多の影響を受けていた。

西 暦（年号）	本 多 日 生	妹 尾 義 郎
一九二八（大正 七） 一九一九（大正 八）	初対面、妹尾に在家勧める（五／一九）	初対面、師事（五／一九） 統一団専任事務を嘱託される（三／七） 青年団結成（二／五）
一九二二（大正一一） 一九二三（大正一二）	立正大師号宣下実現に尽す（一〇月） 関東大震災後の国民精神作興運動に積極的に協力（一〇／一一月）	各地の小作争議を調停（二／三月） 「本尊論批判」執筆（『若人』三／九月号）
一九二四（大正二三） 一九二七（昭和 二） 一九二八（昭和 三） 一九三〇（昭和 五） 一九三二（昭和 六）	知法思国会を創設（七月） 死去（三／一六）	（青年団内の不和が表面化） 青年団の発展的解消を決定（二／一一） 密葬儀参列（三／一八） 新興仏青結成（四／五） 本葬儀参列（五／一六）
	本葬儀（五／一六）	

稲垣真美氏は、青年団の会員について、

……『若人』（青年団機関誌）の創刊当時、誌上にのせられた……会員の分布をみると、東京……北海道……九州にまで及び、当時の朝鮮、台湾、樺太などの外地の人々までふくんでいる。……これは統一閣の本多日生が中心になっていた天晴会や地明会の組織……を利用した結果であろう。^③

と述べている。これに関して、次のようなエピソードがある。

一九二一（大正一〇）年一月、妹尾は自身の闘病体験をまとめた『光を慕ひて』を世に問うているが、本書の「序」を執筆したのは、海軍元帥東郷平八郎、元外相石井菊次郎等とともに天晴会のメンバーだった海軍中将佐藤鉄太郎である。この出来事によって妹尾の佐藤に対する敬慕の念は深まり、妹尾は長男に佐藤から名前をもらって鉄太郎と命名している。^④

また、妹尾の活動には、各地への巡回講演や争議の調停等があったが、後年、新興仏青妹尾検挙の新聞記事を読んで書かれた本郷常次郎「時局と轉向者（妹尾氏の事ども）」には、

……本多上人が金澤へ来られた時『妹尾君はどうし

て居りますか』と尋ねたら、上人は『妹尾先生々と偉いものである妹尾先生でなくては小作争議も纏まらない』と笑話された事もあった。^⑤

とある。このことは、妹尾の活動が、それまで大逆事件の際の活動や自慶会の活動等を実践してきた本多の認めるものだったことを示している。

以上から、青年団は第一次大戦後の社会情勢にに応じて尖鋭化する民衆を日蓮主義の名によって「善導」するものとして期待されていたという稲垣氏の指摘にも首肯できる。

このように青年団と妹尾の活動は、本多の影響を受け、思想善導的な役割を担っていた。妹尾にとって、その活動は生活そのものだった。だが妹尾は、この青年団の活動において、人々の生活実態に触れて社会に目覚め、その思想と行動を次第に変化させていく。

② 「本尊論批判」に見られる妹尾の日蓮教学理解
ところで、本多の影響は青年団という組織や妹尾の活動にとどまらない。それは、妹尾の思想としての日蓮教学理解にも見られる。吉田久一氏は「妹尾が日生から学んだもの」としてナショナルリズムとともに日蓮教学・仏教統一論を挙げている。^⑥ここでは、一九二七（昭和二

年、『若人』に妹尾が七回にわたって連載した「本尊論批判」^⑩を取り上げる。

当時、立正大学学部長の清水龍山と、本多の弟子である青年団幹事の時友仙治郎とが、本尊論争を展開。それが、時友の病氣により中断する。そこで、時友と同じ本多の弟子である妹尾がこの論争を引き継ぎ、「本尊論批判」を執筆する。^⑪

本著は、「第一章 序論」と本論（第二章 観念と信仰」「第三章 観心本尊鈔に於ける本尊の名義を論ず」「第四章 本佛本尊の実質を論ず」「第五章 開目鈔の本迹観を論ず」「第六章 結論」）によって構成され、清水の本尊論に反論を加えるとともに本多のそれを擁護したものである。

妹尾は清水と本多の論について、

……両師の論究の根本態度を批評すれば、清水師は、曼陀羅を本位とした形式論であり、本多師のは佛陀の人格意識を本位とした実質論であるかと思ひます。^⑫

と述べ、南無妙法蓮華経は曼陀羅の中央にあるので主体であり仏であるという清水の主張は、清水が御遺文の中心と見なす観心本尊抄にも南無妙法蓮華経を本尊とする

という判文がないことを挙げて批判し、南無妙法蓮華経を釈尊が慈悲によって「擣籥和合」した唯一の教法規範として受持口唱するという本多の主張こそ、観心門を内具した日蓮主義の信仰形式として最善の形式、とする。

妹尾は、南無妙法蓮華経は法宝であることを、

○……「本門の教主久遠実成の釈尊」が、……本化の
大導師日蓮聖人にのみ附属したまふた……「本門の
肝心の南無妙法蓮華経」が必須不可欠の役割連鎖を
つとめる^⑬

○ 観心本尊鈔に対する私の信解にしてあやまりがないならば、わが本尊の主体はまさしく本門の教主久遠実成の本佛釈尊であって、……五字七字の題目こそ太陽なる本尊の主体本佛教主釈尊が所有せらるる唯一無二の慧光慈熱^⑭

○ 即ち、南無妙法蓮華経は、本門の教主釈迦牟尼佛が、未法のわれら衆生救済のために、その愛弟子地涌千界の菩薩たちに授与された、別していへば日蓮聖人に使命づけられた「観心開悟の唯一の信鍵なる以信代慧」の是好良薬なる法宝であります。^⑮

と様々な表現で明らかにし、その根拠を次のように本多の三宝式に求めている。

観心本尊鈔に説かれた、わが本尊の名義に関する本多師の見解は、報恩鈔開目鈔等と同じく、やはり三宝式であります。三宝式とは言ふまでもなく佛法僧の三宝で、即ち久遠実成の教主釈迦牟尼佛は本門の佛宝であり、南無妙法蓮華経は本門の法宝であり、上行等の四菩薩は本門の僧宝であって、この三宝式をもって、本多師は本門の本尊と立てられるのであるが、この三宝を尅してその中心を求むれば、畢竟、久遠実成の教主釈迦牟尼佛こそ法界総歸命唯一絶対の本佛本尊¹⁶。

以上から、少なくとも「本尊論批判」執筆時の妹尾の日蓮教学理解は、釈尊による仏教統一論という本多の見解そのものだったことが窺える。

三、新興仏青時代

「本尊論批判」執筆から三年後（一九三〇・昭和五）、妹尾の『若人』掲載稿が青年団内の不和を表面化させる。その結果妹尾は、翌一九三一（昭和六）年一月、青年団の発展的解消を決定、四月に新興仏青を結成する。結成直前の三月、本多が病により死去。この時点で本多と妹尾の師弟関係は現実的には終了するが、妹尾への本

多の影響は、新興仏青結成以降にも見られる。

まず、「新運動（新興佛教運動）」の記念すべき「第一声」と妹尾が言う「新興佛教運動の進路——斉に佛陀の大傘下に帰れ——」¹⁸では、「真面目なる青年佛教者に二つの運動を提唱」して、

その第一は、全既成教団を否定し、直爾に佛陀に帰り、新しく佛陀の名による新興佛教青年同盟を實現することだ。その第二は、佛陀の愛と認識に従って、現資本主義経済組織を否定して、共產共栄の新社会建設運動に邁進することだ。¹⁹

と述べ、佛陀が飢餓に苦しむ一青年に一鉢の食物をもたらし与えたことを例に挙げて、

佛陀の教へは單なる觀念運動にとどまるべきでなかつた。飢には食を、寒さには衣を、まことに人生無常の認識に出發して共存共栄の信愛生活そのものの中にこそ永遠の相を見たのではなかつたか。²⁰

とし、佛陀の大傘下に帰っての運動こそ、

……時代救済に必要な名実そろつた佛教復古運動であり、吾等に待望されたる唯一の使命²¹と結んでいる。

また、新興仏青の結成宣言には、

……我等の信ずる佛教は、必然の理に即しつゝ、実践によつて愛と平等と自由とを体証されたる佛陀への渴仰である。

とあり、その綱領の第一に、

我等は人類の有する最高人格、釈迦牟尼佛を鑽仰し、同胞信愛の教綱に則つて佛国土建設の実現を期すと掲げている。²²⁾

妹尾はこの綱領について、「再び新興佛教に就いて——主として第一綱領の本尊観について——」の中で仏教の分裂と釈尊との関係に触れ、諸大乘經典は釈尊の不滅性の再認識とその渴仰であつて、その典型的なものこそ法華經に表示された久遠実成の本仏観であり、日本においても、法華經による日蓮聖人の運動が、仏教の本質——釈尊中心の思想を復興して仏教の正系を示した、と述べている。²³⁾

更に、後に警察が、新興仏青を治安維持法違反容疑で弾圧する材料として使った「新興佛青運動の指導原理と運動方針私案」では、その指導原理として三帰礼（自帰依仏、自帰依法、自帰依僧）を最も適当とし、自帰依仏とは仏陀釈尊への渴仰と述べている。²⁴⁾

このように、青年団時代の「久遠実成の教主釈迦牟尼

佛こそ……本佛本尊」という理解は、新興仏青時代の「佛陀への渴仰」という主張に繋がっており、本多の影響と捉えられる。

おわりに

以上、妹尾への本多の影響について一考察を加えてきた。青年団と妹尾の活動は、本多の影響を受け、思想善導的な役割を担っていた。また、妹尾の日蓮教学理解には、青年団・新興仏青を通じて本多の影響が見られ、それは本多死後の新興仏青の活動原理にまで及んだのである。

註

- (1) 妹尾「四十三年の仏教体験」（妹尾義郎記念会編『妹尾先生を偲んで』妹尾義郎記念会 一九七四年 一二五頁）。
- (2) 稲垣真美『仏陀を背負いて街頭へ』（岩波新書 一九七四年）六二頁。
- (3) 同右 六四～六五頁。
- (4) 同じ頃、東郷平八郎からは、華嚴經の「信為道元功德母」という揮毫をもらっている（妹尾鉄太郎・稲垣真美共編『妹尾義郎日記』第二巻 国書刊行会 一九七四年 一六五頁）。

- (5) 『統一』一九三八（昭和一三）年七月号 五七頁。
- (6) 磯部満事『本多日生上人』（統一発行所 一九三二年）「略歴」五頁、吉田久一『日本近代仏教史研究』（吉川弘文館 一九五九年）五四七頁、堺利彦「大逆事件とその前後」（堺著・川口武彦編『堺利彦全集』第六巻 法律文化社 一九七〇年 二七三頁）を参照。
- (7) 一九一八（大正七）年三月創立。労働者の慰安と善導を目的とした。
- (8) 稲垣前掲書 六七頁。
- (9) 吉田久一「妹尾義郎―求道と社会主義―」（『吉田久一著作集7』 一二三頁）。
- (10) 『若人』第八巻第三号〜同第九号（一九二七・昭和二年三月号〜九月号）。本稿では妹尾義郎著・稲垣真美編『妹尾義郎宗教論集』（大蔵選書 一九七五年 以下、『論集』）を参照した。
- (11) 『論集』八八〜九〇頁。
- (12) 『論集』九〇頁。
- (13) 『論集』一〇六頁。
- (14) 『論集』一〇九頁。
- (15) 『論集』一三四頁。傍線部分は白丸点となっている。
- (16) 『論集』一二七頁。
- (17) 高松宮結婚の豪奢さを批判した内容だった。
- (18) 『新興佛教の旗の下に』創刊号巻頭に掲載された。
- (19) 『論集』二五六頁。
- (20) 『論集』二五七頁。
- (21) 『論集』二五九頁。
- (22) 『新興佛教の旗の下に』一九三二（昭和六）年五月号。
- (23) 『新興佛教の旗の下に』一九三二（昭和六）年七月号。
- (24) 『論集』三八六〜三八七頁。